

(第3種郵便物認可)

栄地区に再び脚光

公示地価 住宅、商業とも上昇



二十七日に公表された公示地価では、名古屋市中心部の栄地区の上昇が住宅地、商業地ともに目立った。これまで東海地域の地価上昇を引っ張ってきたJR名古屋駅周辺に比べて割安感があり、マンションやホテル建設が相次いでいる。名駅の勢いに押されがちだったが、再び注目が集まりつつある。

(天田優里) ③面参照



地価が上昇している高齢者向けマンション(左手前) 周辺=名古屋市中区栄5で



住宅地の上昇幅が9.8%で、愛知県内で一位となった同市中区栄五丁目。久屋大通から約百メートルにある裏通りの一角で、周辺には二〇一四年に開業した高齢者介護サービスタウンや雑居ビル、飲食店などが立ち並び、県によると、記録の残る一九八九年以降、栄地区が一位になったのは初めてという。

今回の地価調査を担当した不動産鑑定士の小森洋志さんは「店舗や事務所、共同住宅が混在する地域。商業地としての影響もあり、複合的な要因で上昇した」と話す。

栄を拠点とする不動産会社「服部殖産」(同市中区)の服部浩明社長(55)は「飲み屋街のイメージが強かったが、数年前から雰囲気が変わり、土地の活用が幅が広がった。地下鉄などの駅が近くて利便性が良く、マンションなど的高額な取引もある」と説明す

商業地の上昇率で名駅周辺に次ぐ県内三位となったのも、栄地区を代表する繁華街「錦三」の一角。スナックやバーなどが入る雑居ビル群の傍ら、複数のビジネスホテルの建設が進む。県宅地建物取引業協会中支部の中林正人支部長(66)は「インバウンド(外国人訪日客)の影響で、どの企業も『ホテルは絶対に外れない』と考える」という。

二七年の名古屋―東京・品川間のリニア中央新幹線開業を見据えた名駅周辺の再開発ブームは、最近落ち着きつつある。一方、その東側に隣接する伏見地区では「御園座タワー」などのタワーマンションやビジネスホテルの建設も相次いだ。中林支部長は「ブームはどんどん東に移ってきている。これから栄地区の再開発が盛んになり、ビジネスチャンスが到来するのは間違いない」と意気込んだ。